４　中学部Ⅰ課程研究班

「生徒の主体性を育む自立活動の指導・支援の在り方

～個別の指導計画に基づく PDCA サイクルを通して～」

ア　研究のねらい

自立活動の指導は、個別の指導計画を作成し、それに基づいて指導を展開しなければならない。また、個別の指導計画に基づく指導は、計画（Plan）-実践（Do）-評価（Check）-改善（Action）のサイクル（以下「PDCA サイクル」という。）で進められなければならないため、PDCA サイクルを確立しながら適切な指導を進めていくことが極めて重要になってくる。

本研究グループは、中学部の重複障がい学級の担当職員で構成されたグループである。昨年度の研究の課題の一つとして「PDCA サイクルシートそのものの見直しや、シートの更なる活用の工夫」ということが残った。そこで、今年度の研究では、PDCA サイクルシートの有効活用を継続していきながら、様式の見直しを行っていくことをねらいとした。また、様々な実態の生徒一人一人の主体的な学びを引き出す自立活動の指導を目指すために、授業実践における PDCA サイクルの中でも Check（評価）が重要であると考えることから、授業研究を通して評価の在り方を探りながら、指導・支援の充実を図っていくこともねらいとした。

イ　研究の内容

（１）理論研究

○　本校の指導教諭及び教務主任による「自立活動」についての講話研修を実施。

○　参考図書による「自立活動」についての理解の推進。

（２）自立活動における「個別の指導計画」の作成

○　今年度は、研究部から提案のあった様式（**資料１**）に沿って各学級の生徒全員分を作成した。

（３）授業実践

○　各学級で以下の手順に従って授業実践を行った。

①　授業計画
②　授業実践
③　PDCA サイクルシートへの記入と取組の整理
④　授業改善
　＊上記①～④を繰り返す

（４）授業研究

○　事前研究･･･「生徒一人一人の主体性をどのように捉えるか」ということについて協議。

○　研究授業･･･学習指導案を作成し、研究授業を実施。

○　事後研究･･･ワークショップ型（KJ 法）による研究協議を実施。

・　協議の柱【主体的な学びを育てるための評価の在り方はどうあればよいか】について、以下の視点で協議を行った。

視点１：「主体性をどのような視点で捉えているか」

視点２：「主体的な学びを引き出せた手立ての工夫」

・　各学級の授業で使用した教材・教具の紹介

（５）「PDCA サイクルシート」の様式の見直し（**資料２**）

ウ　成果と課題

（1）成果

○　昨年度の研究の課題として残った「PDCA サイクルシート」の様式についての見直しができた。

○　指導と評価の一体化を図るためには、生徒のみではなく指導者側の評価も必要不可欠である。そのためのツールとして PDCA サイクルシートを活用できたことは効果的であった。

○　授業研究を行ったことで、重複障がい学級に在籍している生徒の「主体性」の捉え方や評価の視点を協議し、整理することができた。また、授業で活用している自作の教材・教具を見せ合ったことで情報交換ができ、今後の授業改善や指導の工夫等につなげられる有意義な場となった。

（2）課題

○　書き慣れていないことも一因としてあるが、PDCA サイクルシートへの記入の仕方が分からない箇所があったり、簡略化した書式の方が活用しやすかったりすると感じることから、まだ改善の余地があるのではないか。

○　具体的な目標設定が、具体的な評価につながっていくことを踏まえ、的確な実態把握に基づいた個別の指導計画の作成が今後も求められていく。

＜参考文献＞

・文部科学省　「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」(2018)

・全国特別支援学校知的障害教育校長会　「知的障害特別支援学校の自立活動の指導」(2018)

資料１

個別の指導計画

氏名　　**学年**　　**障がい名等**　　**作成日**

【実態把握に基づいて得られた指導すべき課題や課題相互の関連の視点から】

今、指導すべき目標

その目標達成に向けて、何の項目が関連しているか「必要な力」を考える！

健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
(1) 生活のリズムや生活習慣の形成 (2) 病気の状態の理解と生活管理 (3) 身体各部の状態の理解と養護 (4) 障がいの特性の理解と生活環境の調整 (5) 健康状態の維持・改善	(1) 情緒の安定 (2) 状況の理解と変化への対応 (3) 障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲	(1) 他者とのかかわりの基礎 (2) 他者の意図や感情の理解 (3) 自己の理解と行動の調整 (4) 集団への参加の基礎	(1) 保有する感覚の活用 (2) 感覚や認知の特性についての理解と対応 (3) 感覚の補助及び代行手段の活用 (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況の把握と状況に応じた行動 (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成	(1) 姿勢と運動・動作の基本的技能 (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用 (3) 日常生活に必要な基本動作 (4)身体の移動能力 (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行	(1) コミュニケーションの基礎的能力 (2) 言語の受容と表出 (3) 言語の形成と活用 (4) コミュニケーション手段の選択と活用 (5) 状況に応じたコミュニケーション

●　●　●　●　●　●

●　●　●

指導内容			
指導場面	教育活動全体 時間における指導	教育活動全体 時間における指導	教育活動全体 時間における指導
評価			

【次年度に向けた引き継ぎ】

資料２

自立活動 PDCA サイクルシート　～改訂版～

※ポップ体(太字)が追加・変更箇所

中学部（　　）年（　　）組　　性別（　　）

1 個別の指導計画（別紙）

２　自立活動における PDCA

Plan 計画	題材名	チャレンジ！ファイト！～個別の課題学習に取り組もう～		
	授業日時	**月　　日(　)**		
	本時の目標			
	本時の学習	指導内容	指導上の工夫（指導方法、教材・教具など）	
			環境 **＊場の設定** **＊座席配置など**	
			教材・教具	
			手立て **＊教師の関わり** **＊量・順番** **＊提示の仕方** **など**	
Do 実践	生徒の様子			
Check 評価	指導上の工夫	指導内容		
		環境		
		教材・教具		
		手立て		
Action 改善	指導上の工夫	指導内容		
		環境		
		教材・教具		
		手立て		
Plan 計画	実態把握のし直し（有・無）			
	目標の再設定（　有・無　）→　次時の目標「　　」			
	指導内容の再設定（有・無）			

◇◆◇　主体性を捉える際の視点（例）　◇◆◇

・表情　　・選択、決定
・動作　　・見通しをもつ
・言葉　　・自らの行動

◆主体的な学びを引き出す手立ての工夫（例）◆

○教材・教具の工夫　　○教師の関わり方の工夫
○環境設定の工夫　　○提示の仕方の工夫
○目標設定の工夫　　○順番や量の工夫

５　中学部Ⅱ課程研究班　「中学部Ⅱ課程の自立活動（時間における指導）はどうあればよいか」

ア　研究のねらい

中学部Ⅱ課程は今年度より「自立活動（時間における指導）」を週１時間設定し、試行を開始している。Ⅱ課程の生徒の実態として、コミュニケーションや情緒の安定に課題があり、人間関係や学校生活に困り感を抱えている生徒が多く見られる。また、四肢に障がいのある生徒も在籍しており、自立活動における個々の課題も様々である。授業研究を通して、生徒一人ひとりの実態把握、目標設定、具体的な指導内容等について教師間で協議し、より生徒の可能性を伸ばす実践につなげていくというねらいで本研究を設定した。

イ　研究の内容

（１）理論研究

○　新学習指導要領「自立活動編」（文部科学省）、「自立活動の指導（ジアース教育新社）」を読んだ。

○　本校の指導教諭及び教務主任による「自立活動」についての講話研修を実施した。

○　昨年度作成した「自立活動　年間指導実例集」を見直した。

（２）情報収集

○　他校や他県での実践事例を収集した。

（３）自立活動における「個別の指導計画」の作成

○　今年度は、研究部から提案のあった様式に沿って、各学級の生徒全員の「個別の指導計画を作成した。

（４）授業実践

各学級では、生徒を個別に抽出したり、実態別グループに分けたりして個に応じた指導を検討し、実践した。研究授業として、１１月の教科・領域総合訪問の際に、初任者研修、中堅研修の代表授業、１月に指導教諭による授業を計画し実施した。

ウ　成果と課題

（１）成果

○　指導教諭、教務主任による「自立活動」についての講話を通して、教師間で自立活動の捉え方を再確認し、理解を深めることができた。

○　自立活動における「個別の指導計画」を作成するにあたり、個人の実態把握から目標設定、実際の授業実践に至るまでの流れを共通理解することができた。

○　授業研究を行ったことで、教師同士での課題の共有や授業の進め方、自作の教材・教具についての情報交換ができた。

（２）課題

○　中学部３年間を通して、切れ目のない支援が引き継いでいけるような「自立活動の個別の指導計画」はどうあればよいか、現在の記入項目が十分かどうかを見直す必要がある。

○　「個別の指導計画」を活用し、一人ひとりの課題に応じた授業の展開を行うための手立てや指導形態を工夫していく必要がある。

＜参考文献＞
・文部科学省　「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」（2018）
・全国特別支援学校知的障害教育校長会　「知的障害特別支援学校の自立活動の指導」（2018）
・「個別の指導計画の様式」（福島県特別支援教育センター）
○　添付資料・・・個別の指導計画　※中学部Ⅰ課程と同様のもの

６　高等部Ｉ課程研究班　「卒業後の豊かな自立を見据えた指導・支援の在り方について」

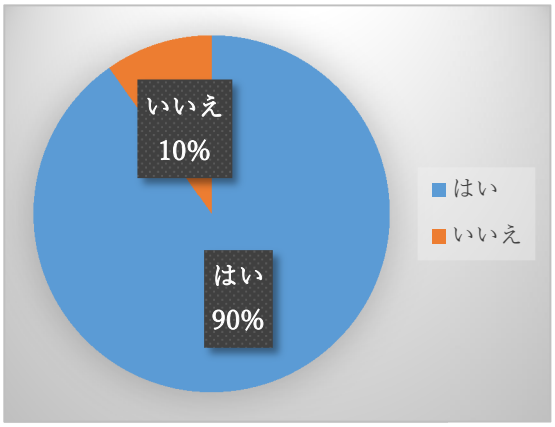
ア　研究のねらい

Ｉ課程の生徒の実態や現状を共通理解し、新たな教育課程の検討を行う。

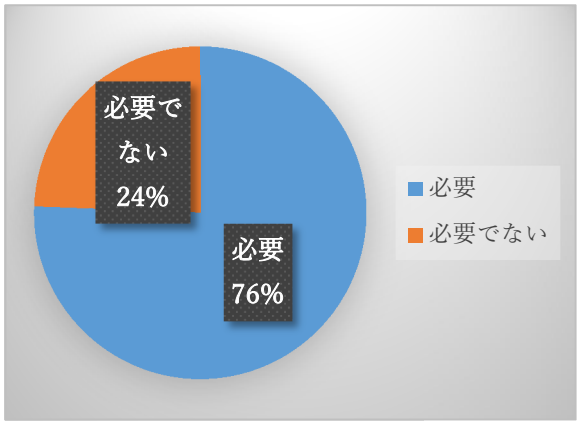
イ　研究の内容

本校高等部Ｉ課程の現状について認知度を測るとともに、現在Ｉ課程を担当している（過去に担当したことがある）職員に向けて、生活単元学習や自立活動の学習内容、Ｉ課程においての教科学習の必要性と、どの教科を必要と感じているか、そして現在または今までにＩ課程において課題に感じたことについてのアンケートを行った。

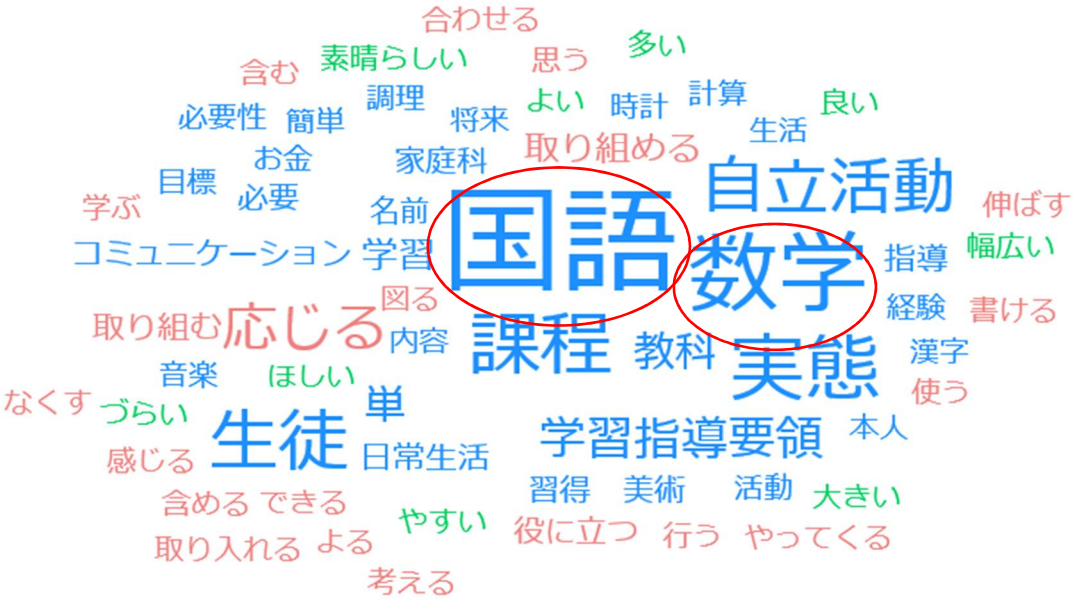
Ｑ　現在の本校Ｉ課程の教育課程が３つに分かれていることをご存知ですか。



Ｑ　Ｉ課程における教科学習の必要性



Ｑ　高等部Ｉ課程に教科学習を取り入れるとしたら、どんな教科が必要ですか。その教科名とその理由を教えて下さい。



校内研究　Ⅰ課程研究班　資料（Ⅰ－ⅳ課程案）

学級種別		重複障がい学級			重複障がい学級		
課程		Ⅰ－ⅰ	Ⅰ－ⅱ	Ⅰ－ⅲ	Ⅰ－ⅳ（案1）	Ⅰ－ⅳ（案2）	Ⅰ－ⅳ（案3）
学年		1・2・3			1・2・3		
年間授業週数		35	35	35	35	35	35
基本週時数		30	30	30	30	30	30
年間授業時数		1050	1050	1050	1050	1050	1050
各教科を合わせた指導	日常生活の指導	192.5	192.5	192.5	192.5	192.5	192.5
		5.5	5.5	5.5	5.5	5.5	5.5
	生活単元学習	117	187	222	117	187	140
		3	5	6	3	5	4
	作業学習	322.5	322.5	322.5	322.5	322.5	322.5
		9.5	9.5	9.5	9.5	9.5	9.5
教科別の指導	国語				35	35	35
					1	1	1
	社会						
	数学				35	35	35
					1	1	1
	理科						
	音楽	68	68	68	68	68	68
		2	2	2	2	2	2
	美術						
	保健体育	105	105	105	105	105	105
		3	3	3	3	3	3
	家庭						
	職業						
領域別の指導	道徳						
	特別活動	35	35	35	35	35	35
		1	1	1	1	1	1
	自立活動	210	140	105	140	70	105
		6	4	3	4	2	3
総合的な学習の時間							

Ⅰ課程研究班より
・　Ⅰ－ⅳだけで学級を作ることが難しい場合を考えると、Ⅰ－ⅰ、ⅱ、ⅲのいずれかと組み合わせやすいような時数にした方が学級運営もしやすいのではないか。　⇒　案1～3
・　入学時からⅠ－ⅳが適当という判断はできるのか？（入学説明会では教科テストは実施していない。）
・　次年度から実施となった場合、保護者への説明は？
（案1）‥Ⅰ－ⅰの教育課程がベース。生単3　自立4（自立6の内2時間を国数各1時間に）
（案2）‥Ⅰ－ⅱの教育課程がベース。生単5　自立2（自立4の内2時間を国数各1時間に）
（案3）‥Ⅰ－ⅲの教育課程がベース。生単4　自立3（生単6の内2時間を国数各1時間に）
　※　現在　1年‥全員Ⅰ－ⅰ　2年‥全員Ⅰ－ⅱ　3年　Ⅰ－ⅰ、Ⅰ－ⅲ　各クラスごと

ウ　成果と課題

以上のアンケート結果を学部会にて提示し、Ⅰ課程の教科学習の必要性に関して協議を行った。協議の結果、年度によっては、生徒の実態でⅠ課程における教科学習が必要のない年も予想されるが、必要な年のためにⅠ－ⅳ課程を設立し、準備しておくことで承認を得た。

今後、Ⅰ－ⅳ課程の設立にあたって、どの段階の生徒がⅠ－ⅳ課程に該当するのかという「基準」の設定が課題として考えられる。また、教科学習を学級で行うのか、Ⅱ課程の学習グループに入って行うのかなど、年度ごとの生徒の実態に応じて柔軟に対応していく必要があると考える。

７　高等部Ⅱ課程研究班　「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて～生活単元学習～」

ア　研究のねらい

昨年度は、生活単元学習の年間指導計画を新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」の点で見直した。今年度は、さらに研究を深める意味で一単元を選び、研究授業を行い、「主体的・対話的で深い学び」を目標にした授業のあり方を研究することにした。

イ　研究の内容

○見直した年間指導計画、新学習指導要領に関しての共通理解を図る。

○「高等部の修学旅行の事後報告会」に研究の焦点を定め、内容、指導上の配慮事項等についての共通理解を図る。

○実務的な計算プリント（買い物、金銭関係など　実際の修学旅行時の買い物を想定した）を収集する担当を決め、数学の授業や毎日の宿題に活用できるようにする。

ウ　成果と課題

＜成果＞

○生徒達が主体的に活動する授業実践に向けて、展開の仕方、指導の手立てなどについて、意見交換しながら共通理解を図ることができた。

○各班別行動での活動グループで発表することを提示した。生徒同士で協力し合って、役割分担を決めて発表する姿がみられた。

○各グループで活動することによって、普段はおとなしく控えめな生徒も積極的に参加することができた。質問タイムでは高校生らしい素朴な質問も飛び交い、場が和み、生徒同士の対話的な姿がみられた。

○現場実習の事前事後学習で発表する経験があったためか、発表する力が少しずつ伸びてきた。

○研究授業後の国語の授業では、「将来、また東京に行ってみたい」「旅行するなら友達や家族と行ってみたい」と、前向きな感想文がみられた。

○２月の校外学習においても、各班に分かれ報告会形式で進路先についてまとめていくことにした。（事前、事後指導）

＜課題＞

○高等部Ⅱ課程の生徒達の実態が様々であり、その実態差に応じた内容をいかに展開するか、その中で生徒達の主体的・対話的で深い学びへどう導いていくかが課題であると感じる。

○このような合同での授業を計画する際、教材研究や学年での共通理解の時間をどう確保するかが課題であると感じる。

※参考文献

○「特別支援学校高等部学習指導要領等」：文部科学省 HP

○「特別支援学校　学習指導要領解説　各教科等編（小学部・中学部）」：文部科学省（2018）

○「特別支援学校　教育課程編成資料　Ｑ＆Ａ」：宮崎県教育委員会　特別支援教育室（2011）

○「特別支援教育のアクティブ・ラーニング」：三浦光哉（2017）